国立国会図書館所蔵『虫の諫』

――翻刻と解題――

揖斐　高
牛田きぬ
高橋昭男
塚本照美
山口　旬

解題

〈『虫の諫』について〉

本稿は、江戸中期の儒学者・漢詩人である江村北海の『虫の諫』上中下三巻の翻刻と解題である。『虫の諫』は和文体の散文作品で、北海五十歳の宝暦十二年（一七六二）秋に出版された。本稿を成すにあたって底本としたのは、国立国会図書館所蔵になる『虫の諫』三巻、北海江村綬著、唐本屋吉左衛門刊行（宝暦十二年）、請求記号W119-18、原本代替請求記号YD-古-6724、国立国会図書館書誌ID0000032844957の刊本である。

〈作者江村北海について〉

作者江村北海（一七一三～一七八八）は江戸中期の儒学者・漢詩人として知られる。伊藤龍洲の次男として生まれ、兄の伊藤錦里、弟の清田儋叟とともに兄弟揃って高名な文人学者であった。北海は江村毅庵の養子となり、その跡をつぎ丹後宮津藩に仕官する。そして、二十代の元文年間に二年間ほど江戸藩邸詰めとなり、その藩邸の庭に集まった虫達に作者が語り聞かせたという設定で書かれたのが『虫の諫』であった。この江戸詰めの後に長く京都留守居役をつとめることになる。能吏であった江村北海が藩を正式に致仕するのは『虫の諫』刊行の翌年である宝暦十三年（一七六三）である。

〈成立事情〉

本書『虫の諫』の執筆時期とその執筆契機は作者自身の「虫の諫序」（和文）に次のように記されている。

元文の頃、われ故ありて、二とせあまり、東都に住侍ることありしに、其やどり林園寛敞にして、あたかも郊外にあるがごとし。秋にもなりぬれば、草葉にすだく虫の声〳〵、都恋しく、いねがてのまくらにきくものから、いとゞあはれさも数そひつゝ、そこはかとなく、思ひつゞくる言草を、たはふれの筆に任せて、ついに若干の巻となりぬ。

元文年間の二年間の江戸詰めの時期にその郊外の如き閑静風雅の中、都恋しさに眠れぬつれづれに戯れに書き記した作品と言うのである。この記述から問題となるのは、執筆時期と刊行時期のおおきなずれである。元文年間（一七三六～一七四〇）の執筆と宝暦十二年（一七六二）の刊行では二十数年の不自然な間隙がある。この理由については前述の自序では、

人に見すべきにあらねば、そのまゝの反古となして、年経ぬるに、このごろ、童子の探り出して、取ちらしたるを、書肆玉樹堂、一たび見て、懇に請てやまず。

とのみ述べて明確にしていない。しかし、宝暦十二年（一七六二）の刊行時に附された北海の弟の清田儋叟の序文「虫の諫の後に書す」（原漢文）によれば、

人或は謂ふ、仲兄東都に在るの日、激発する所有りて作ると。

とあり、次兄である北海が江戸藩邸詰めの日々に「激発する所」があって作った文であることを人からの伝え聞きという形で述べている。自序に「人に見すべきにあら」ずと言い、儋叟の序に「人或は謂ふ」と伝聞の形をとるところから何だかの忌避され公にできない藩の内部事情に関わる具体的な事件が作品の執筆契機となっていることが想像される。残念ながらこの藩内の事件に関しての詳細は不明だが、二十数年という年月の経過と北海の致仕前年という時期になって初めて出版の条件が整ったのであろう。致仕の後、北海は京都詩壇の中心として、儒学者・漢詩人として大きな活躍を見せていくが、『虫の諫』は文人として独立する以前の藩士としての思いを綴った作品ということになる。

ちなみに、言わば若き日の「激発する所」を致仕寸前に掘り起こして刊行したことに関して、高橋昌彦氏は「江村北海の前半生」（『国文学論考26』都留文科大学国文学会・一九九〇年三月刊行）において「嘗て元文頃に抱いていた内心の激発が、再び訪れたということではあるまいか」と述べておられる。

〈内容〉

本書は『虫の諫』という書名からも明らかなように筆者が虫達にその長所短所を語り聞かせるという設定で書かれている。成立事情から考えて虫そのものを博物学的に記述するのではなくあくまで擬人的に現実の人間社会を寓意した内容である。その「目録」には、

上巻　序論　胡蝶（附蜻蛉青虫）、蜂、蜘蛛
中巻　蚕、蟬、灯蛾、蜉蝣、蝿・蚊（附蚤蝨）
下巻　蛙、蛇、金亀、蛍、蟋蟀

とあり、おおむね本文と対応しているが扱いの軽重や順番など一致

しない場合もある。また、巻の区分も分明ではなく内容は連続している。

上巻冒頭の「序論」は発端と言うべき部分で本書の設定を明らかにしている。七月十日あまりの夕暮れに縁に出て作者が涼んでいるところ虫たちの会話が聞こえてくる。鈴虫と松虫の会話に続き蚤と蛙の会話が始まり、蛙が「かしこに端居し給ふ何某なる人こそ、幼きより書よむ事を好み給ひ唐の倭（やまと）のふる事もよく知り給ふとこそ聞侍れ～我類のよしあしをも、尋ね極め参らせん」と（江村北海らしき）博識の作者に対して諸虫類の品評を求めることを提案し、他の虫たちも皆作者の前に集まってくるのである。この後は主に各虫に対する作者の一人語りとなる。

上巻でまず取り上げられるのは「胡蝶」である。その、青虫としての生まれを忘れ美しい成虫となれば富貴とのみ交際する軽薄さ、農民の苦労して育てた大根などを食欲のままに食い尽くす強欲さ、表面的な美しさのみを追いかけることで世の中が乱れることなどが批判される。続いては「蜂」だが、軽薄さは蝶と共通し、武職の働き蜂など君臣の礼があり、蜂蜜を作るなど才はあるが、勇を頼み徳はない、とされる。

「蜘蛛」は上巻の中心と言うべく記述は詳細にわたる。まずは、みだりに生物の命を損なって自らの栄養とすること、毒を持つことが批判される。そして歌語に蜘蛛を「ささがに」というように優雅な面に隠れた陰賊とする。ここまでは胡蝶・蜂と同じ構造である。つづいて、七夕乞巧の祭りに「蜘蛛の糸をまとうと思いがかなう」という俗信をもとに「巧を求める」行為を批判していくのだが、これは虫に対する批判という本来の設定をやや逸脱している強弁になっていく。巧を求めたのは蜘蛛ではなく人間だからである。そして、弁舌の巧みな者が藩政を乱していると、寓意として表現するべきだった直接の内容が思わず露呈して長文となっている。

上巻をまとめて言えば「軽薄さに対する批判」と言えるだろう。

中巻は比較的肯定的な批判から始まる。「蚕」は自らの身を殺して人の寒さを防ぐ自己犠牲の精神があるし、「蟬」は高所に棲み清らかな樹液を飲むという高潔さがあるとする。ただ蟬は鳴く為に捕らえられてしまうし「灯蛾」も自ら灯に飛び込み焼け死んでしまうという愚かさがある。「蜉蝣」も短い寿命でありながら美しく飾って山野に遊び楽しむさまが一部の人には愚かとされるが美麗を好まず富貴を慕うこともなく、あるに任せて身をいさぎよくたもつという識見は高いとする。その根拠として、そうした生きとし生ける者全てに共通する無常迅速に関する一般論を長文で展開している。

ここまで中巻の前半部は「愚かさに対する批判」と言えよう。

中巻後半部は「蚤・蝨・蝿・蚊」で現在でも害虫と分類される四虫である。その中にも序列があり、蚤・蝨・蝿・蚊の順番に罪が深くなるという。蚤・蝨はもちろん蝿も過去に言い尽くされており「いはずともありなむ」ということで記述は最も罪深いとされる「蚊」が中心となる。人をかむ、うっとしい行動、昼夜の時と場所を選ば

ない、また二十四孝の呉猛の至孝にも感じず肌を刺すなどの短所が述べられる。中巻末尾に作者は「蚊」の記述を受けて「世上の見及び聞および中に、汝に似たる人も多し」と寓された本意が顔を出している。

下巻前半は「蛇」から始まる。憎むべき点は世間のよく知るところで、その毒を持つこと、邪知深い点が批判される。

ここまで中巻後半部と下巻前半部を合わせて「邪心に対する批判」が述べられる。

つづいて「蛙」である。貴公子である鶯に対して野人である蛙が歌を詠む（鳴く）のは、片田舎の村民が都や難波に上り和歌誹諧茶香蹴鞠などに興ずるようなものであり、本業を忘れ分をはずれた行為であるというのである。ここでは鶯や和歌論という余談的挿話をはさむ。次は「金亀（たまむし）」である。この虫に対する批判は、何の才もなく風流冶容に専心している、と簡単に語られるが、その後に「ただ金亀のみならんや」と寓意の設定を逸脱、虫の世界を離れて人間社会の批判が縦横無尽に典拠を駆使して長文で語られる。内容は好色・色情の愛着への批判である。その批判は三都の外の諸藩の城下なども乱れていること、また色・情・慾の分析などにも及び、男女の色情の乱れなど多数の典拠を列挙して詳細に語られる。

ここまで下巻中間部は「慾心に対する批判」が語られる。

最後の下巻末尾は今までの「蝶」から「金亀」の部分とは違って上巻の「序論」の発端部に対応して書かれた結末部である。今まで語られた様々な短所を持つ虫達に対してどのように解決策を授けるか、と本来の設定に戻って首尾一貫させている。「蟋蟀（こおろぎ）」は文武才徳いずれも優れているので虫の長となって外の虫達を指導していけばいい、というのが結論である。

このように読んでくると、本作品は、発端、本論（「軽薄さに対する批判」「愚かさに対する批判」「邪心に対する批判」「慾心に対する批判」）、結末の三段構成の構想を持ち、その中心主題は本論で記述される「軽薄さ・愚かさ・邪心・慾心に対する批判」と跡づけることができる。成立事情から考えてそのどこかに本意があるはずだが、作品上からはこれ以上のことは明らかにできない。何箇所かで露呈する本意から想像するのみである。

〈典拠〉

「軽薄さ・愚かさ・邪心・慾心に対する批判」を様々な虫達に仮託して批判する作品であるが、博物学的に現実の虫の生態の観察によるのではなく、虫たちに関する和漢の挿話がその根拠となっているために膨大な典拠が羅列して記述され作品の中心となっている。その典拠は適切なものもあれば強弁とも言えるものもあるのは前述した。

典拠は膨大で一々示すことはできないが、例えば上巻の蝶の項の一節「春の胡蝶の夢の世をかこち、夏の蟬の春秋をしらぬを歎き、或は醢雞の甕裡の天の大なるにほこり」だけを見ても『荘子』「胡蝶の夢」、『徒然草』第七段、黄山谷『演雅』などが背景になっていることが想像される。全編にこのように典拠故事がちりばめられて、

あたかも類書の「虫」の項を見るようである。

この典拠の引用に関して注意すべき点がある。例えば、「胡蝶」の項で「撲蝶の辞は楽府の選に入り」と記述されるが、「撲蝶辞」なる作品は『楽府集』になく、あるのは填詞の「撲蝴蝶」である。「蜘蛛」の項では「唐の韓幄が詩にも、昨夜裙帯解今朝蟢子飛など作りたり」と記述されるが、「昨夜裙帯解今朝蟢子飛」の詩は韓幄ではなく中唐の権徳輿の作として知られる。「金亀」の項では「蘇武胡國にあるうち、胡婦になれ、二子を設けぬと、史冊にみへ」とあるが、この「史冊」と見られる『漢書』の記述には蘇武の子は「二子」ではなく「一子」となっている。蘇武は故郷にも一子がいてそれとあわせると「二子」になるのと混同しているのかもしれない。「蛍」の項では「書生の時は孫敬先生の窓に寄宿し、読書の功をつみぬれば」とあるが、これは「蛍雪之功」で知られる晋の車胤の故事である。孫敬先生は「孫敬閉戸」という別の故事で知られる人物である。

全体の膨大な典拠の数からもその博識ぶりは十分知られるが、こうした引用の誤謬からは、類書の引き写しなどではなく該博な知識の記憶から一気呵成に執筆していることが想像され、むしろ当時の学者の博学に驚嘆させられる。

〈文体〉

文体に関して作者北海は「虫の諫序」（和文）において「華文にもあらず、和文にもあらず、雅語あり、俗語あり、まことにわけもなきすさみといふべし」と述べている。華文（漢文）でないのはもちろんだが、和文でもないと言っているのは所謂雅文でないことを言っているのだろう。「雅語あり、俗語あり」とは『詩経』などの古典からの引用もあれば、「胡蝶」の項の「頼む木の下に雨もる」などのことわざの引用もあることを示すであろう。

他に注意されるのは熟語の表記法である。連字符「-」を熟語の中間の左右に附し音読と訓読を区別している。この表記法は主に漢文の訓読の補助的な記号として用いられる方法であり、漢学者の書いた訓読調の和文にふさわしい表記法であった。本稿では可能な限り本文に忠実に再現してある。ちなみに一字だけの場合は左右の傍線で表してある。

（山口 旬）

凡例

一、国立国会図書館所蔵の板本『虫諫』（宝暦十二年刊）を底本とした。

一、漢文序については原文を翻刻した後に、《 》のなかにその書き下し文を示した。

一、底本の和文中に引用される漢文については、底本通り返り点・送り仮名を付した形で翻刻した。

一、漢字の字体については一部は底本通りとしたが、原則として通行の字体に改めた。

一、底本の漢文序には句点が「。」あるいは「、」で付されている。原

文の翻刻ではそのままとし、書き下し文では文意により句読点を打ち直した。また和文体の序文および本文では、句点が「。」で付されているが、これについても文意に従って句読点を打ち直した。

一、原文に付されている濁点は便宜的で必ずしも厳密に付されているわけではない。したがって翻刻では適宜濁点を加除した。

一、畳字の「〻」「ゝ」「ゝ」「〳〵」などは底本のままとした。

一、本文中の二行割りの小書きは、（　）を付し、活字を小さくして一行に翻刻した。

一、漢字の振仮名は底本のものであるが、これにも適宜濁点を補った。なお、底本の漢文序の書き下し文には適宜現代仮名遣いで振仮名を付けた。

一、底本にはまま連字符が付されており、右寄せの連字符は音読を、左寄せの連字符は訓読を指示している。翻刻においても底本通りに左右の連字符を区別して付した。

一、底本の漢字には時に音読か訓読かを指定する右左の傍線が施されているが、これもそのまま翻刻した。

一、底本に段落分けはないが、翻刻では読み易さを考慮して適宜段落分けをして改行し、段落の始めは一字下げとした。

一、底本には挿絵が十二図付されている。挿絵については底本での位置を考慮して、翻刻のしかるべき所に適宜配置した。

〈付記〉
＊翻刻の礎稿は二〇二一年度成蹊大学大学院日本文学研究科「近世文学特殊研究」の発表をもとに各員が分担作成し全員で検討して確定した。
＊原稿の取りまとめと調整は牛田衣・山口旬が担当した。

翻刻

北海先生著

虫　諫

平安　玉樹堂発行

虫諫序

以人諫虫乎。以虫諫人也。籬下草虫秋至必吟。蓋機之所触。不能不吟也。嗟乎。高山流水。人琴俱亡。従吾者其虫歟。是虫諫所以由興矣。

宝暦己卯之冬対梢館主人自叙

《虫の諫序

人を以て虫を諫むるか、虫を以て人を諫むるなり。籬下の草虫、秋至れば必ず吟ず。蓋し機の触るる所、吟ぜざること能はざるなり。嗟乎、高山流水、人琴俱に亡し。吾に従ふ者は其れ虫か。是れ虫の諫の興に由る所以なり。

宝暦己卯の冬、対梢館主人自ら叙す》

書虫諫後

斯書也、蓋出仲兄江君錫先生一時戯筆、而有至理存焉、人或謂、仲兄在東都之日、有所激発而作、然邪否邪、人有所激、其言必廉、雖仲尼之聖亦爾、抑顧其人静躁如何耳、詩之六義、比居其一、楚辞用之、人哀其忠、香譜用之人哂其鄙、苟其不躁、即廉奚妨、仲兄才行双勝、而能用其量矣、而能用比之義矣、古人有言、曰言発於心、而衝於口、吐之逆人、茹之逆心、余以謂、寧逆人矣、故卒吐之、嗚呼、与其逆人矣、孰若逆虫矣、作者無咎、観者有資、虫諫邪、非虫之謂矣

宝暦壬午之春　　弟清絢拝撰

《虫の諫の後に書す

斯の書や、蓋し仲兄江君錫先生の一時の戯筆に出づ。而して至理の存する有り。人或は謂ふ、仲兄東都に在るの日、激発する所有りて作ると。然るや否や。人、激する所有れば、其の言は必ず廉、仲尼の聖と雖も亦た爾り。抑も其の人の静躁如何を顧るのみ。詩の六義、比は其の一に居る。楚辞、之を用ふれば、人、其の忠を哀しむ。香譜、之を用ふれば、人、其の鄙を哂ふ。苟も其れ躁ならずんば、即ち廉なるも奚ぞ妨げん。仲兄は才行双勝にして、能く其の量を用ふ。而して能く比の義を用ふ。古人言ふこと有り。曰く、言は心に発して、口に衝き、之を吐けば人に逆らひ、之を茹へば心に逆らふと。余、以謂らく、寧ろ人に逆らはんと。故に卒に之を吐く。嗚呼、其れ人に逆らふ、虫に逆らふに孰若ぞ。作る者、咎無し。観る者、資有り。虫の諫か、虫の謂に非ざるなり。

宝暦壬午之春　　弟清絢拝撰》

虫の諫序

元文の頃、われ故ありて、二とせあまり、東都に住侍ることありしに、其やどり林園寛敞にして、あたかも郊外にあるがごとし。秋にもなりぬれば、草葉にすだく虫の声〳〵、都恋しく、いねがてのまくらにきくものから、いとゞあはれさも数そひつゝ、そこはかとなく、思ひつゞくる言草を、たはふれの筆に任せて、ついに若干の巻となりぬ。華文にもあらず、和文にもあらず、雅語あり、俗語あり、まことにわけもなきすさみといふべし。人に見すべきにあらねば、そ

揖斐 高・牛田きぬ・高橋昭男・塚本照美・山口 旬

国立国会図書館所蔵『虫の諫』――翻刻と解題――

のまゝの反古となして、年経ぬるに、このごろ、童子の探り出して、取ちらしたるを、書肆玉樹堂、一たび見て、懇に請てやまず。もとより雞肋とだにもいふべきものならねば、是に附与して、覆醤のそなへとなさしむるに、猶も此書のよるところを、初にしるしあたへよといへば、いなみがたくて、二度筆を西京にとるといふ。

宝暦己卯の冬

北海江邨綬

虫の諫目録

序論　胡蝶　青虫蜻蛉　蜓附
蜂　蜘蛛
右上巻
蚕　蟬
燈蛾　蜉蝣
蝿　蚊　蚤蝨　附
右中巻
蛙　蛇
金亀　蛍
蟋蟀
右下巻

虫乃諫上

七月十日あまり、残るあつさの昼間すぎて、やゝかげろふ庭の面に、一村雨うちそゝぎ、萩、桔梗、女郎花、秋待えたる花の色〳〵、尾花、かるかや乱れ合、雨の余波の露の珠、光りあらそふけしき、鄙にほどふる身のうさも、しばしなぐさむ心地して、そゞろに端居の夜ぞ更ぬ。独り静に聞まゝに、檻ちかく鳴虫の、己が時と競ふ声〳〵、何事とわくべくはあらねど、かの賈誼が服鳥賦に臆をもてせんといひし理り、こゝろゆく方に聞なせば、そのあらましぞしられける。

草の陰より、鈴虫の、ふり出ていひぬるは、今宵の月のくまなさよ、かゝる夜を、たゞにやみなむはいと本意なし。秋深く霜むすびなば、我儕いかに思ふとも、いかでかゝる円居を得む。いざや我類ひのちかきにあらんほどを招き集め、萩の錦のむしろのうへに、尾花が袖を片敷、来し方行末、夜をすがらに語りなぐさまむ。其方はさなきだに、誰まつむしの名に立給へば、今宵のあるじもふけなし給ふべし。機織のぬしも、梭をなげて休み給へ。つゞれさせてふは、折もこそあれといへば、よくもの給へるものかな。是ぞ類ひなき思ひ出ならん。

さらばかなたこなたへ告やらんに、誰が此使してむ。蜈蚣のすこやかなるこそ、かゝる事には便りあれといへば、傍のむしのさし出

て、雨後の泥濘途のなやみはさることなれど、つとめて素足にて行給へ。そこの数多き足ごとに、わらぐつのしたゝめあらば、はてしなきことならめといひてわらひぬ。

しばし見る内に、かしこの木陰、こゝの垣根、軒端のひま、築地のやぶれより、羽あるは飛、羽なきはあゆみ、あまたの虫ども、所せきまで、すだき集が、何くれと語りつゞくる其種さ、あげて記すべくもあらねど、なべては、春の蝴蝶の夢の世をかこち、夏の蟬の、春秋をしらぬを歎き、或は醢雞の甕裡の天の大なるにほこり、又は百一足の馬蛟、鼈の足なへたるを笑ふ類ひにこそあめれ。（二句、黄山谷が演雅の語。）

かゝる中に、水にすむ蛙斗、初より物をいはず、念じ入たる体にて、さしうつぶき居たりけるを、蚤の目はやく見とがめて、何とてかくはおはす覧。そこは敷嶋の道に名高くましませば、今宵の月にさぞな妙なる詠もおはさん心にくさよといへば、蛙打きゝていやとよさにはあらず。我は思ふ故あるぞかし。よく聞給へ告げ参らせん。

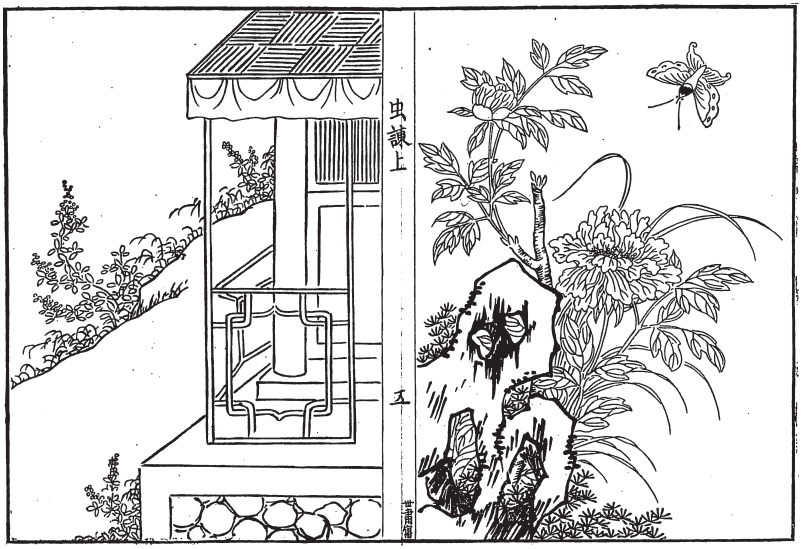
夫天一地の間に生とし生る人と物との数多きも、人より尊きはなし。物の中にていはゞ、獣は鳥にまさり、虫は鱗におとれり。されば世中に我類ひ斗いやしきはなし。獣に麟あり。鳥に鳳あり。鱗に龍あり。此三つのものは、人の尊きを以てすら、なみ〳〵にはなぞらふること叶はず。たゞ聖人斗ぞ此三のものに、徳を配することぞかし。されば各その類ひの長として、よきをすゝめ、あしきを退る政明らか也。

たゞ我類ひ斗かゝる長なく、古へ嵯峨野の虫合せといふ事ありて、大宮人の打群、我類ひの勝るおとる定め給ひしかど、只声おかしく形いみじきをのみよしとし給ひ、才と徳との沙汰にもあらず。

世人は金亀を我類ひの君などいへども、是も女童の言草にして、唐のやまとのさるべき人は語り伝へねば、其をきてに従ふものなし。されば蛇の強きは蛙のよはきをくるしめ、蜾蠃の情なき、妄に幼きものをかどはかし、（蜾蠃は世俗に云似我蜂にて、他虫の子をとりて己れが子とす。）蝸牛の角の争ひ、終にやむ時なし。

今宵そこたちの語り聞ゆることといへども、皆世をいきどをり、時をうらみ、他をそしり、己をほこる。いとあさましきことにして、我は是を歎かしく思ふなり。是皆我類ひの上に教へ導く長なくして、我輩生るゝより死に至るまで、よきことはかりにも聞かず、あしきならひの性となり、世中の有様は只かゝる事とのみ心得、別によき理りありと知らぬ故ならずや。

然るに今宵幸の事こそあれ、かしこに端居し給ふ何某なる人こそ、幼きより書よむ事を好み給ひ、唐の倭のふる事もよく知り給ふとこそ聞侍れ。されば螽斯の詩さたるには后妃の物ねたみし給はぬをほめ、青蠅の営さたるには、讒人のさかしらを悪み、凡は我類ひのこととへ共、蛍の窓の内にして、よくわきまへおはすべければ、いざや諸共にかしこに至り、我類ひのよしあしをも、尋ね極め参らせんは、いかゞあらんといへば、有合ふ虫の声〳〵に、実理りとこそ覚ゆれ。いざらせ給へと打むれて、皆わが前に集りける。われ是に



告ていふやう、世遠く道微にして、まことに志あるは、人にもまれなり。まして類ひ異なるをや。かゝる志こそありがたけれ。

しかはあれど、人と物との類ひことにして、汝が鳴音のわれ聞しるべくもあらねば、我云聞す事、汝いかで是を弁むといへば、蛙すゝみ出て、こは仰せとも覚へ侍らず。介葛盧は獣の心に通じ、公冶長は鳥の声を聞わけ、何某は床の下の蟻のたゝかふに驚しなど、其まこと偽りは知らず。古へより書伝へ語り残して、皆世にしれる所。只我類ひと憐みおぼせよといへば、吾其理りに服して、心におもふ一つ二つを、口に任する物ならし。

夫つら〳〵汝が類ひを察するに、其族極てしげし。甲ある、足ある、羽ある、羽なき、水に住み、岡に飛、山に隠れ、里にまじはる。其時も又ことなり。されどなべて啓蟄のころよりぞ、其類ひは世に広まりぬ。春の日影長閑に、東吹風やはらかに、花紅に草緑なる頃しも、簷をめぐり籬を過る、胡蝶の戯斗楽しげなるはなし。されば、唐のやまとの、詩に作り歌に詠み、撲蝶の辞は楽府の選に入り、胡蝶の巻は源氏の帖にのれり。其全盛のありさま、誰か汝に及ぶべき。されば汝が類ひの末が末までも、汝が身上をうらやみしたはざるはなし。（諸虫多く蝶に化する故に云。）たゞ汝が類ひのみにもあらず、人といへども又しかり。唐の荘生は夢中に汝が形となり、我邦の佐国は死一後に汝が姿と化す。たゞ人のみにもあらず。陳麦の無一情なるも、又よく化して汝となる。（小麦の蝶に化するをいふなり。）

されば汝が心を察するに、揚〻として定まらず、汝が形をみる

に、翩〻として静かならず。凡、世中にわれほどよき身の上はなしと思へるさまぞかし。されども吾を以て汝をみれば、いといやしみ悪むべきものとこそ覚ゆれ。汝が今のゆたかに楽しげなるは、生れしまゝの幸ならず。汝がなりたちは、もといやしき菜むし毛むしにて、そのかみ貧しかりし時は、一重の衣の、身を覆ふだになく、其形のむくつけきを、世の人にいみ嫌はれ、汝もさすがはづかしと思ふにや、木〻の枯枝を取集め、身の程隠す巣を作りて、木陰ふかく下りかくるゝも有。世にこれをみのむしとぞ云める。

此時にあたりて、汝が罪尤多し。青葉にまじる遅桜いと清らなる庭の梢に、所せきまですだき集り、しばし取捨るに怠ればいと見苦敷なりもて行、人の詠めをそこなひぬ。又わけて憎むべきは、賤の男賤の女の、夏|日のあつきをもいはで、種まき土かい、心をくるしめ、やしない立る土大根蕪菜の葉ごとに、汝が友を語らひ、残りなく喰破る。汝がわづかなる口|腹の欲を恣にして、民の歎きを顧りみず。かの蟊賊のいなむしに、其罪おとらざるべし。されば汝がなりたちの、いやしく悪むべきは、かゝることなりしぞかし。

いかにいはむや、一|旦はからざる福を得、今のありさまと成ぬれば、たちまち本の身を忘れ、むかしおのがどちと語りむつびし、根切、すくもむしの類ひは、世にあるものとも思はず、たま〳〵往来の路に逢ても、しらぬ顔にもてなし、只富貴のまじはりをのみ願ひぬる。かゝる程に世中の物しれるは少く、しらぬのみぞおほかめる。堯の聖をもてすら、人を知ることはかたしとぞの給ひし。況や今の世の人に於てをや。ましていはんや、汝が類ひことなるをや。世上の人といへど、汝が翅の白粉に、つくろいかざれる色にめで、又は便辟の身のふるまいにまどはされ、昔のあしかりしは思はで、詩に作り歌によみ、往昔むくつけくうるさしと思ひし、宮女閨人も、かざしの花に汝をしたひ、羅の団扇に汝をまつ。

唐|の玄宗の時にあたりて、六|宮の粉黛百にあまり千に超、何れをそれとわくべくもあらねば、あまたの宮女を一つ所にあつめ、其中に汝をはなし、汝が翅をやすむる、花のかざしをしるべに、夜のおとゞへ召れぬとかや。古聖人の御代をしろしめす、后妃女|御の御にあたり給ふも、皆其定まれる夜な〳〵ありて、あへてこれにたがひ給はずとこそ見へたれ。是なん君|恩の、一|方に偏にして、寵を得てはをごりほこり、寵を失ひては恨み妬む事、なからしめんが為ぞかし。しかるに、玄|宗の汝を以てかゝる事司らしめ給ひしに、もとより軽薄の汝なれば、かの嬪御の中にも心正しく操ある人はよりそはで、只上の衣美しく、空炷のこがれぬる、かざしの花の色よきにのみとゞまりぬ。是よりもろ〳〵の宮女も、女の道は心にも入れず、只よそ目のうるはしからんことをのみおもひけるにぞ、閨|門の政、日〻に乱れ、遂に馬嵬の災を醸しなしぬ。されば汝が性は至りて軽|薄なり。

園の木立の中にも、松|栢のみさほありて、心かたきは、へんくつものもいみきらひ、かりそめにも立寄らず。只桜海棠牡|丹山|吹のごとき、花の富貴なるが許へしたしみへつらふ。かの桜山吹のごと

き、花はげにうるはしけれど、人の餓を助くる実のひとつをだに結ばずして、只其奢りたなびたる心、又汝が類ひなれば、汝が軽薄のふるまいを悦び、いと懇にもてはやしぬ。

弥生の空うらゝかなるに、珠の簾風を捲縫の幃日にかゞやく。さもやごとなき庭の面に、紅葩霞を奪ひて、糸竹の筵を照し、素英雪をこらして　杯酒の床にうつる。さくら牡丹の花の全盛、又いはむ方なし。かゝる中に遊びたはふるゝ、汝が心には定て思ふべし。われこそ又なきよきよるべ求め得たれ。傍へには何ともいへ、われはひたすら牡丹の花王を君と仰ぎ、こがね花咲く山吹の心に従ひ親しまば、我身の栄花も共につきすまじと。汝知らずや、奢るもの久しからず。又しらずや、黄金結ブレ交ヲ黄金尽て交うとし。

春の花の富貴いく程ぞや。夏の青葉とみるが内に、秋風吹立、露霜に色づくほどもなく、とみに落葉と朽はてゝ、おのが根を覆ふ斗の蔭もなくなりねれば、諺に云、頼む木の下に雨もるとは汝が身の上なるべし。かの春の頃、花もなく、淋しく見へし松栢は、此時にあたりて、緑物ふかく、木陰も頼もしげに見ゆれ共、汝常〳〵おろそかにもてなし置つれば、今更俄に立寄ること叶はず。かなたこなたさまよふにぞ、始て己が身の程を思ひしり、二たび根切すくもむしの、古き友を尋ね、もとの穴へ入らんとすれば、なまなかの翅出来て、己が身も心に任さず。野辺の草葉は枯れはてゝ、口をうるほす露もなければ広き天地に、わづかなる身の置どころなく、終にあらぬ方にたふれ死ぬ。心よりなすとはいへども、又悲しからずや。されば前車のくつがへるは、後車のいましめとや。

胡蝶の身のなれる果を見て、おのがどちの鑑とはなさで春過夏来ぬれば、彼やんま、とんぼうの、とがにならひ、果は童の手に渡り、縲紲に身をくるしむるこそ愚かなれ。さるにても唐人は、なべて蜂蝶と並べ称しぬれば、蜂も又蝶の類ひぞかし。げに花に遊び、柳にたはふるゝ　軽薄の有様、蝶に替る事なし。されど我よく是を思ふに、蜂のなり立心ざまは、又蝶と異なり。黄蜂、黒蜂、土蜂、蜜蜂、蜾蠃　蜣蜋の氏族多しといへども、惣て代〻帯刀の武職なり。（蜂に剣ある故にいふなり。）

されば、宮仕の道にならひたるを以て、蜂蟻に君臣の礼ありと、古人もほめ置たり。又勤番の時刻を違へぬを、蜂衙といふ事も侍るめれ。是其生れ得しまゝの長ぜる処ぞかし。しかのみならず、唐のやまとの文も、其かたはしを窺ひ、詩作り歌詠み、いとやさしき方もあれど、只其心のなだらかならで、先達の教に従ふことなく、自らことなる一体を作りはじめて、蜂腰の体とはいへど、誰もてはやすこともなく、長く詩歌の病とはなりぬ。又は芳野なる、妹背の川の渡し守を、世に蜂媒と称するは、いかなる理りならん。かゝる事をとり集め、合せ考ふるに、其才智は、もとよりなみ〳〵の虫にこへたり。

凡、世の人といへども、才と徳との二つ、全くそなはるはまれなり。才ありて徳なきを小人といひ、又才は用る処なしなど、儒生の常談なれど、なべてさいはゞ、才あり徳ある人、世中にいくらあらん。才もなく又徳もなきは、害こそなからめ、事しげき時にあたりて、

やくもなき事もこそあれ。一つ二つの才あるをも、其程にしたがひて使ひなば、其利益もありなまし。只よく才を使ふ君こそあらまほしけれ。もしさもなからんには、かの才ありて徳なきが、なせる災もすくなからず。蜂のごときも才ありて徳なき生れとやいはむ。口にあまき蜜ありて、腹にするどき剣をかくすこそうたてけれ。されば唐の李林甫がうち見には長閑にて、よく人をしこぢそこなふを以て、蜂にたとへしも実さることぞかし。

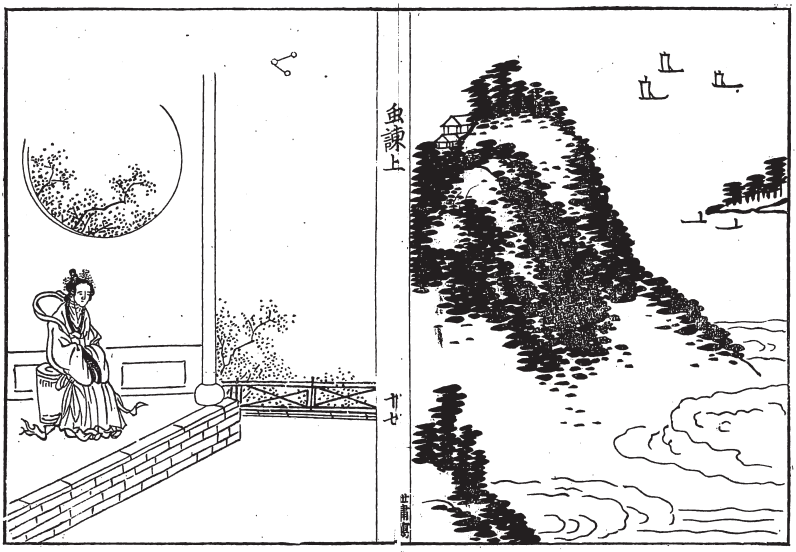
何れの御一宇にかありけん、蜂のよくものをしこぢ、さしいたましむるを、皇の御心ににくしと思して、秋津洲のうちに詔まし〳〵て、あらゆる蜂を召捕へ、遠き三熊野の浦に流しすて給ふことあり。かゝりし後、外にはおほやけの御気色をおそれ、内にはおのがあしかりしを悔て、何事にてもあれ、世中に利益あることをなして、是までの罪をつぐのわんと思ふ心出来て、春の朝な〳〵、山〳〵里〳〵を打めぐり、もろ〳〵の花の露を、翅にしめて立還り、かの美濃の国や、老を養ふ瀧川ならねど、あまねく世に益ある薬をかもし成しぬ。是よく才を使ふ、かしこき君の御おもんばかりをなん、人皆感じける。（是は蜂蜜の熊野より出るに本づき云。）

さるにても世中のありさま、すべて頼む事有べからず。才をたのみ、勇を頼むもの、終には其害をまぬかれず。蜂は剣の利をたのみて、我に敵する虫なしと思へど、はからざる蛛の糸に触、千筋の縄一目に其身をくるしむ。蛛蜂の争ひとて、刀剣の具の錺りにも彫、我も亦其争ひを度〻見侍りぬ。蛛のゐに蜂の身を失ふもおしむにたらず。蜂の剣に蛛の命をおとすもかなしむべからず。蛛の悪むべきは猶蜂にまされり。其故如何となれば、凡、世中に生とし生るもの、各いとなむわざありてこそ身の養ひはあれ。

人の上にていはゞ、士は仕へ、農は耕し、商はひさぎ、工は造る。物の中にも、馬は載せ、牛は負、犬は家を守り、猫は鼠を追ふ。皆其つかさどることありてこそ、人の養ひをも得れ。蜜蜂は、春の花の露を採て、秋冬の食となし、群蟻は、暑中に糧をあつめて、雪裏の用に供す。其余かゝる事なきも、各身を養ふいとなみありて、妄に物の命をそこなひ己が養ひとするはなし。

たゞ蛛斗さあらずして、窓蔀庭の梢迄も、誰へ告て、誰が許しを受るともなく、所せきまで網を張、往来の虫をなやめくるしめ、命を取て己を養ふ。身は肥ふくれ、われは顔なる風情、誰か汝を悪まざらん。他の国には蠱毒と云ことありて、其人を殺すこと、金蚕犬一神より甚し。蠱一毒は五月五日に、百一虫の毒を集むといへども、蛛の毒を勝れたりとす。おそるべく悪むべきは汝なるを、我邦の人はいかでさゝがにの蛛のふるまいなどゝ、優にやさしく云かしづくにや。我つら〳〵其故を思ふに、蛛の性至りて陰賊なり。されば己が毒をほどこし、物をそこない、世上ににくみいとはれ、身を置方なきまゝに、わきまへなき婦一女をたぶらかし、まさなき道にいざなひ入て、其心を悦ばしめ、よき名を盗むなるべし。

衣通姫の御事はいともかしこし。蛛のふるまいと詠給ひし御心はかりがたし。唐の古き礼には、男女七つになりぬれば、一間に居て遊



びたはふれずとも、また媒の便りならねば、男―女互の名をも聞しらずともこそあれ。定まれる妹脊の中にはまつ暮のうらみもなく、あかぬ別れの悲しみもあるまじ。さあらんには、汝か案内も何にかせん。

玉の杯そこはかとなく、正なき恋路に分迷ふよりこそ、心なき鐘をかこち、咎なき鶏を恨み、汝がごとき幇間的をも頼むにこそあなれ。されど此事、唐にも古くは伝へて、唐の韓―幌が詩にも、昨―夜裙帯解今―朝嬉―子飛など作りたり。されど是は定まれる我夫の遠つ国より帰るを待しなれば、待も実ことわりなり。

又世の人はさのみ心もつかで、只我ひとり汝をにくしと思ふこと一つあり。抑七夕の星祭りは、続斉諧記其俑をなして、其説後―世にひろまりぬ。さるほどに、乞巧の祭りに供ふる菓物に、汝が糸をまとひぬれば、願ふこと心のまゝとは、汝誰をたのみて、かゝる評―判を世上になさしめたるにや。是に付ても世の人の巧を求め、巧を乞ふこそうたてけれ。

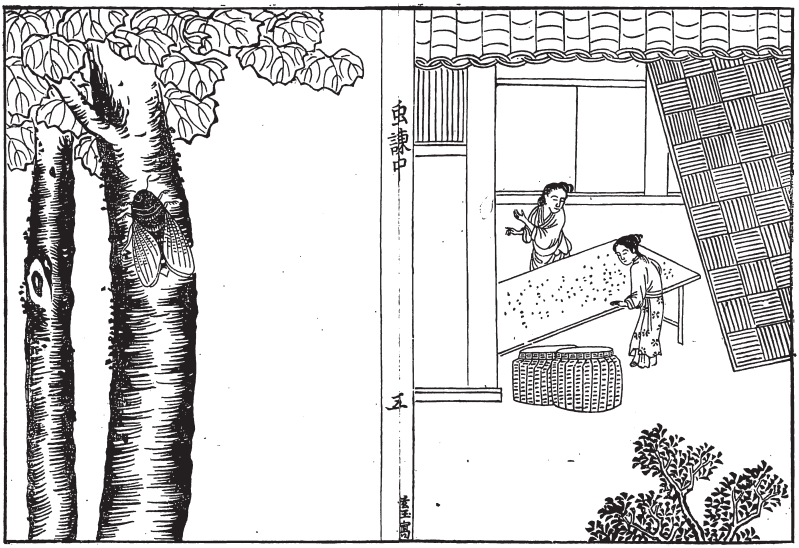
今の人は百年あまりも過し世のことを聞ては、其巧ならざるを笑ひどよまざるはなし。されど又百年も過なん後は、又いかなる巧なることも出来ぬべし。俗―吏のともがら儒―生の講―説などを聞ては、げに梁―王の迂闊なりとの給ひしも理りなれ。まして今の世は、かゝることにてはなきものをと、したり顔に云のゝしる。昇平年久しく、奢―靡風俗をなして、国―用ともしき折を得て、聚斂の吏、縦横の客、桑弘羊が遺―智を振ひ、第―五琦が余―舌を動し、三―都の間に往―来し、四方の藩府に出―入するもの、幾十百人なるをしらず。是皆巧な

るの甚しきものなり。
　されど士窮り、民くるしみて国|用いとゞ空乏なれば、其巧みなるしるしもみへず。されば世の人の巧なりと思ふも巧みならで、拙しと思ふも拙ならず。ひたすら拙なかれと願ひても、次第に巧みなりもて行は、世中のすがたなるを、汝いかなれば巧みを以て人にすゝむるにや。其物を害し、俗をやぶり、士|風をみだるの罪又大ならずや。

虫の諫　上

虫の諫　中

　さるにても、善|悪の相反けるは、実水と火とのごとくなめれ。他を害して自ら養ふ蛛もあるに、いかで蚕は身をころして、人の寒さをふせぐ覧。木綿花をうへしは、近き頃にこそあれ、麻の衣はありとも、綿なくばいかゞせん。つばなの穂、蘆の花をいれたりとも、かの閔子騫がこゞへたらん様なるべし。
　蚕のおこりは其代遠し。馬頭娘の説こそあやしけれ。唐の古き礼には、親蚕といふことありて、后の宮手づから桑とり給ひ、つぎ〳〵の宮女、其位に随ひ何くれと、その委しきことは、古き史に見へたり。是かの皇の、藉田の礼に配して、衣|食のたやすからぬを、万民に教へしめし給ふなりけり。
　実蚕の功は五穀にもおさ〳〵おとるべからず。身を殺して世を救ふは、かの肉を剜て飢たる鷹にあたへんとの、仏祖の御心にも叶ひ、又身を殺して仁をなすとの、聖の御詞にも似たるめれど、かの明哲保身との給へるに、たがひたるこそ悲しけれ。凡人といへど、生死の道大なり。命は一つなれど、或は山より重く、毛よりも軽し。捨つべくして捨ざれば、恥を千|歳の後に残し、また捨まじきに捨るも、其理りに違ひぬるは同じからん。かの愚かにしることなきが、争ひどよみて、益もなきに命をおとし、又男女のみそかごとして、せんすべなみに身を沈め、くびれしぬるなどは更にもいはじ。
　蚕のごときは、性極めて霊なるものにて、是を飼ふに物にあやかりて其形をなす。漢の時一人の寡婦あり。古き枕にいねやらで、壁の崩より隣の家に蚕をかふを、何となくのぞき居たりけるに、明の日、隣|家の蚕眉をなしけるが、彼寡|婦の形にぞ似たりけり。目もと眉のかゝり、さだかには見へわかねど、是をみるに誠に物おもふ形なりしとかや。蔡中郎是を聞て、価厚く買求め、其糸をねりて、琴の絃となして弾じけるに、其声世にあはれなり。
　か様に霊なるものゝ、などや身のひとつを保たで、湯鑊のくるしみを受るならん。されど代さの史をみれば、かのこゝろ正しく才めで度が、時のよからざるに逢て蚕の死を得るもの多し。蚕の命も捨ずとも有なん。されど其捨るが、物に感ずるのふかくして、世を救ふ心の切なるなれば、かの捨べくして捨てやらず、恥を忍びて生とし生るにはまさりたること大ならずや。人も物もみがくべきはこゝろ、おさむべきは徳なり。品形こそ生れおとるとも、心はなどか、



賢きにうつさばうつらざらん。

濟蟾化して腹育となり、腹育化して蝉となると、王充が論衡に見え侍れば、蝉のなりたちはかの胡蝶にかはることなし。されど高きに居て清きをのむ、いさぎよき行ひは、胡蝶のむさぼりて恥を知ざるとは、いか斗の違ならん。されば唐の侍中の官人は、金を以て蝉を造り、冠のかざりとなすも、汝が操に似んとを求る心とかや。又、晋の陸子龍は、蝉に五徳ありともほめ置たり。

さらば世にも人にもうやまわれ、やすらに身をも過なむもの、、竿に黏してうかゞふ童、はからざるに襲ひ来り、糸もてつなぎ又は小き籠に押籠られ、或は情なきからすのすきまもなく探し求め、あらぬうき目に逢こそうたてけれ。世には人に悪まれながら、飽迄に食ひ、暖に衣て、身を終るもあるに、いかで蝉ひとり、かゝる災にかゝる覧。天の御心は常なし。只よき人にくみするとの、古き詞もいつはりなるや。釈氏の所謂、過去の因果といふにやあらん。身に災をとる道はなきものをと、汝自ら思ふべし。

されどわれつくゞ汝が行ひを察するに、みづから災をとる道なきにあらず。凡、末世のありさまをみるに、人も物も心むさぼり行よこしまなるこそ、世上には多かめる。それを清くいさぎよき蝉の心よりみたらんには、いか斗悪しともいやしとも思ふらめ。されど世を挙て皆かくのごとし。汝ひとり是を悪みても、世を治むる位もなく、物を教る職にもあらねば、是を悪みてもいかゞせん。聖は世を絶すらもあり。又国に道なき其言遜ふともの給ひ、又小人を悪む

こと甚しきは乱也とも侍るめり。

今汝がふるまいをみれば、皆此聖の詞にそむけり。其災をとることむべならずや。さほど世をいとひ、俗を悪まむには、深き山、遠き境へもいたりて、静に志を養はゞ誰か得て汝を害せむ。然るに今間近き庭の梢にすみて、朝な夕ななき訴ふ。其なき訴ふるは何事にかあらん。思ふに、世は皆酔り、我独り醒たり。物皆濁り、我ひとりすめりなどの、述懐成べけれ共、汝と類ひ異なる人さへも、あなかしがましと、耳をおゝふ斗なれば、まして汝が類ひの、耳にあたり、心にさはり、汝を助けをかば、おのがどちの為あしかりなんと思ふより、弁へなき童、情なき烏をかたらひ、汝を殺して枕を安〳〵する成べし。たとへ烏のすききまなく求むとも、声をだにせでありなんには、いかで汝が有所を知らん。実口は禍の門なりけり。やまと唐の古き史をみれば、汝が類極て多し。其人がらはなみ〳〵にすぐれたれど、世に処し災をまぬかるゝ才なく術なきなめり。

されば蟬の災にかゝりぬるも、みづからとる道なきにあらねど、是は猶云べし。理りなきは燈蛾の身にこそありける。人の中にも極ておろかなるは、其知ること、虫におとりたるあり。されど火に入てはやけこがるゝといふことしらざるやはある。寒き頃、火桶など抱き居たるは、手と火との間、寸にもたらず。されどあやまちても火にふれざるは、火のおそるべき理り、よく明らかにわきまへしれるによりてなり。水に入てはおぼれ、河豚を食すれば毒にあたるなども、あまねく世にしれることなれど、是はおぼれず、毒にあたらぬ人もあまたあれば、われもさあらんと頼む方ありて、その災にかゝるもの世に絶ず。物を盗み、人をころすたぐひも、あらはれぬれば、きびしきおきてにあふといふこと誰か是をしらざらん。

されどかゝるともがらもしばしは天地の網にもれ、とみにあらはれぬもあれば、かゝるわざ、我だに人に語らざらんには、誰か知るものゝ世にあらん。ことをみそかになしなむには、いつまでもあらはれじ。其あらはれ罪にをこなはるゝは、始をわりのとぢめあしく、はかりごとのおろかなるよりぞあらはれぬらん。我はかしこくなしてんものをと、頼む方ありて、かゝる類ひの世ゝに絶せぬなるべし。かゝることをなしなむには、あらはれざるやうやある。あらはれなんには、死なでやはあるといふことを、かの火にふれては、やけこがるゝといふことを、よくしりたるがごとくしりなんには、誰かかゝることをなすものゝあらん。

されば大方に知ると、よくしると、しるにも其品こそあらめ。しからんには、文よみ物学ぶとも、よく知り、よく弁んこそあらまほしけれ。是は燈蛾の愚かなるを言むとて、あらぬ言の長くぞ成ける。かゝる程に、極てをろかなる人といへど、火に入ては、やけこがるゝといふことしらざるはなし。いかにいはむや、燈蛾ばかり、わざと火に入て身をこがす覧。汝そも燈を取得べき物とおもふにや。しる事なき虫類とはいへども、あまりなるまでおろかなることなめり。

しかはあれど、人より燈蛾を見ればこそ、かくおろかにみゆらめど、それも燈蛾の身となりては、いかばかりさりがたき事のありて、

かの燈のほしくもやあらん。人の求むとも得まじき富貴を、あながちにもとむるをも、人ならぬものゝ、傍よりみたらんは、燈蛾のをろかにみゆると、何のことなることかあらん。

さるにても、物をむさぼりて身をわするゝをば、夏の虫の火に入にたとへ、又ものゝはかなきためしには、蜉蝣の夕をしらぬとこそ云なる。げに朝に生れて夕に死ぬは、命短きものゝきわめなるべし。我邦にては蜻蛉をもかげろふと云にや、蜻蛉の小野、蜻蛉の窟などには、みな蜻蛉の字を書たり。

又、蜻蛉の中に、羽黒くあし赤きが、秋の夕つかた、水草の辺りをさまよひあそぶを、かげろふといふとなんいふ人もあり。我いとけなかりし頃、播摩の赤石といふ処にあり。秋の夕つかた、めのとにいだかれ、後園にあそびしに、くろき蜻蛉の、物さびしく飛かふを、彼は何ぞと尋ねしに、是なんかげろふと申むしにて侍らふ。此虫朝に生れ夕に死。かゝるはかなき身を以て、いつくしく身をかざり、何心なく遊びたはふれ、やがて死ぬる身とも思はぬさまこそ、をろかにもはかなくも侍るとこたへしを、今もよく覚へぬ。

是はわきまへなき下つかたの女の詞なれど、かの詩経に蜉蝣ノ羽衣裳楚さとあるに心通ひて聞へ侍るこそおかしけれ。げに此夕死ぬべき身ともおもはず、かたち作りいみじく出立、山野水草の間にあそびたのしむさま、かの無常迅速の理りを、思ひとぢむる人より見たらんには、いか斗おろかにも、はかなくも思ふべけれど、是皆かげろふの本意をしらぬなるべし。彼何のはかなきことあらん。是をはかなしと思はゞ、生とし生るもの、何れかはかなき数にもれん。

人の上寿百歳とはいへども、九十をたもつ人も世に少なし。大方は七八十の内外を限りとす。されば今七十を過、八十をも超ぬれば、長く生延けり、目出度齢なりと悦び羨み、五十六十にもたらで死ぬれば、あなうたてまだ行末の齢もあるものをと、歎きおしみぬ。しかるを人の寿命三百歳をもたもつこと、かの武内の臣のごときが、世中にいくらもありなんには、今長く生延けり、目出度き齢なりといふ。八十九十にて死したらんも、いか斗命短かく、はかなくもやあらん。さらば其武内の臣のごときは、命長きのきわめなるか。

華表の鶴詞をかはし、緱嶺の駕約をなし、杯を瑶池の上にすゝめ、笙を碧桃の下に吹、神僊の類ひより見たらんには、かの武内の臣のごときも、又いか斗命短くはかなくもやあらん。されど神仙の渺茫たるは、其説の真偽もはかりがたし。鶴は千年亀は万年と人の常にいふこと也。是とても人の六七十のよはひを以て、鶴亀の千万年を、ためしこゝろみたるにもあるまじけれど、なべて女童までかくいふ程に、さだめて長寿なるものなるべし。今人の身を以て鶴亀にかはることのたやすくなりなんには、人の身をすてゝ鶴亀と成べきや。人と生れては、人相応の楽みありて、鶴亀の長寿といへども、さしてうら山しとも、かはり度とも思ふ人なし。

されば蜉蝣の一日を一生とするも、定まれる寿命なれば、人寿百年を限ると同じこと也。一日を一生とする蜉蝣の身より、百年を保つ人をみんことは、猶人より鶴亀をみると同じことなり。蜉蝣は蜉

蝣相応のたのしみありて、百年の人寿をも、うら山しとも、かはり度ともおもはぬは、亦猶人の鶴亀に替りたきとも、羨しともおもはぬごとく成べし。人も物もひたすらに世をはかなしとのみ思ひとりて、さしこもりて死の至るをまつは、かしこしとやいはむ。をろかなりとやいはん。

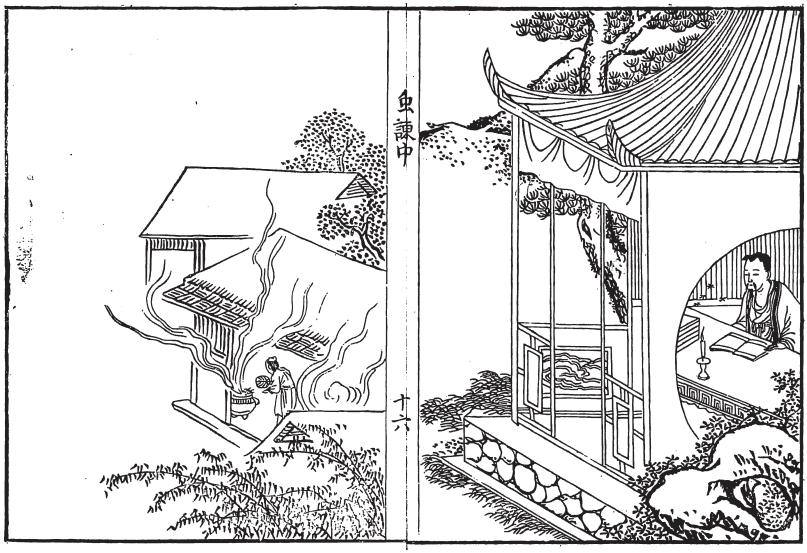
徒然草に、ある法師、あまり無常迅速なるを思ひとりて、何方えも出ず、只念仏のみとなへて往生を遂しと書置たり。いとたふとき志といふべし。されどそれも一方には定めがたし。人界のありさまかの仏ぼさちの界地にはおとりたるとも、餓鬼畜生などの界にくらべなば、いか斗まさりたらん。

さればこそ、人界に生をうくるもなみ〳〵ならぬことと、仏書にも見へ侍りぬ。われも人も生れぬさきはいかゞありけんしらぬことなれど、もし餓鬼畜生などの境より、今日人と生れ来りなば、又なき悦びならずや。況や人と生れきても、生盲聾唖の、五官の用乏しきも有。又五官備りても、襁褓を出ずして死するも多し。されば人界に生を得、五官具足して、襁褓を免れ、成人にいたるは又なきよろこびならずや。それを嬉しとも有難しとも、思ひなぐさまで、さしこもり死のいたるをまつは、かしこしとやいはん、愚なりとやいはん。

世の人のさま〴〵邪なることをなすも、皆其心のあきたらぬよりおこれり。人〻をのれ〳〵が身の程に安じたのしまば、非義の望みはすくなかるべし。仏書の数〳〵もすべて生死の事大なるを説り。げにも生死事大なりといへども、なまなかに此理りを求めぬれば、却て迷ひのはしともなりなんかし。生老病死時至れば行との、裴晋公の一語の肝要なるにすぎず。貴きも賤しきも、生死の時至れば辞することあたはず。たとへいかほど忘れ置とも、少も約を違へぬものは、司命の使なり。されば一日も世にあらん程は、分にしたがい心をなぐさめ、やすらに身を終んことこそあらまほしけれ。さらばとて、公私の勤をもなをざりにし、子孫の教をもなさず、あるは世の費へ人のそしりをもかへりみず、ほしいまゝにあかし暮らせよとにはあらず。

今蜉蝣の様をみるにかたち作りはなせども、かの金亀鳳蝶の出立のごとく、彩色の美麗を好むにあらず。其遊びたはふるゝ所といへども、艶蝶冶蜂のごとく、桜牡丹の富貴繁華をしたふにもあらず。あるに任せて身をいさぎよくもち、水草清き処にうそぶきありき、心をなぐさめ、思ふことなく一生を終る。其識見の高き及ぶべからざる所あり。

世には早くも死ねかしと思ふに、命長く世にも人にもいとはれ嫌はるゝ物こそ多かめれ。虫の中にていはば、蚤蝨蚊蝿などのごとき是なり。此四のものは其心ざし誠に遠からず。其中に、もろこし人は蝿をすぐれて悪むことにして、我邦の人は只しらみを嫌ふなる。それもさることなれど、猶公の論とは云がたし。われつら〳〵此四の物の罪の軽重をはかりたくらぶるに、蚤の罪尤軽し。蝨は是に次、蝿と蚊との罪は、蚤蝨に百倍せり。此二の中にては、蚊の



罪又蠅に倍せり。実上刑に伏すべきものなめり。夫青蠅の営々たるは、詩経にも見へ侍れば、蠅を悪むの源すでに遠し。是よりこのかた、代々の詩人文士、巧を尽して其悪むべきさまくはしく書つらね置たる中にも、六一居士の憎蒼蠅賦などは、殊に世のよくしれる所なれば、蠅の悪むべき事は、今更にいはずともありなむ。

蚊蝱肌をかめば、終夜いねやらずと、荘子にも見ゆれど、俗士のなべて知れるにもあらず。王閔が蚊子賦、欧陽が憎蚊の詩、皆蚊の悪むべき数〳〵を書伝へたれど、かの憎蒼蠅の賦のごとく、世人のあまねくしれるにもあらねば、何となく其罪の蠅よりも軽く聞ゆめる。さればわれ今蚊の罪のかくれたるをかぞへあげて、これを天下に顕はすべし。夫蠅のとゞまる所には、汚を残し、白きを汚して黒くなし、黒きを汚して白くなす。物の白黒をみだるものなればとて、讒人の人の善悪を乱るにたとへて、詩経には云置り。しかれども是はたゞ物を借りたとへをもふけたるにて、蠅のけがれとていか斗のことかあらん。

蠅の多くあつまりたるは、げにいぶせく堪がたきものなれ共、されば とて、人を噛てはれいたみ、血流れなどすることにてもなし。まして一間のうちに三つ四つ飛ちがひたるは、何程のなやみかあらん。

蚊のごときはしからず　蚊帳の内にわづか一つ二つも入ぬれば、七尺の躯是が為に安からず。況や其数の多き、蠅よりも猶十倍せるをや。夕暮ごとに、軒端の外にあつまりどよむ声おびたゞしく、蚊蝱の声雷をなすとの古語、そらごとならず。手もたゆき迄、蚊遣火を

扇ぎ、両|眼より悲しともおもはぬ涙こぼれ、或はむせ返りくるしき迄煙くゆらせ、わづかに一|間の外へ駆出し、障紙さしかため、しばし心安く覚ゆれど、暑さたへがたきまゝ、又すこし障|紙を明ぬれば、やをら集りどよむ声、はじめに替らず。閨の扇も破れたくる斗、前|後打たゝき、身をそばだて、いさらゐをもたげなどさう〳〵しく、客人などに打むかひたる心ぐるしさいか斗ならん。

かくて後蚊帳へ這|入、一重のうすものを、金湯のかためとたのみぬれば、夜|更人しづまるにしたがひ、四|面に楚歌の声、耳に入てすさまじく、枕に安き夢も結ばず。すこしすきまあれば、やがて類をいざなひて忍び入、心よげに歌うちうたひて、耳のほとりを過行さまいとにくし。すはや今こそ目の上をとをるよと、手をあげて打たゝけば、思ひもよらぬ臂の傍より、身をかはして逃去ぬ。せん方なきまゝ、起上り紙燭ともして、なれたるかたびらに、一重帯などしどけなくしながら、手さしのばし、あるはふすまの上をはひ廻り、そこよこゝよと、尋わびたるさま、傍より人のみたらんには、いか斗おかしからん。かくてやう〳〵見付得て、残りなく焼殺し、わづかに怨をはらすといへども、体うみ、気つかれ、汗を流しいきまきぬ。およそかゝるうくつらき事は蝿の似るべき物かは。其罪の蝿にまされる一つ也。

蝿は昼出て求食、蚊は夜出て求|食。おの〳〵定まれる天|地のおきてにて、蝿のむさぼりてあくことなきすら、夜に入ぬれば何処ともなく跡をかくして、あへて人に近寄らず。いかにいはむや蚊斗は此おきてにもしたがはず、物くらき所には昼といへども襲ひ来り、人をなやます事夜に替らず。是天地の命にそむき、約|信を守らざる、其罪の蝿にまされる二つなり。

さるにても、人の徳|行誠|実の天地の御心をも動かし、物類をも感ぜしむること、古も今も唐にも我邦にも、其例すくなからず、一々かぞふるにいとまあらず。

雀来て幕に入、魚躍りて氷に上り、毛宝が亀、陸機が犬なとは、これらの人もよく知ることなり。虎は獣の中にて心おそろしきものなれど、揚香が孝に感じては尾をたれて影をかくし、劉琨が政にめでゝは河を渡りて他|郡に去。鴉は鳥の中にて貪りて情なきものといへど、曾子の孝を感じ、又顔烏が庭にあつまる。其外鰐魚の恐しきも昌黎が文に跡をひそめ、蝨賊の害大なるも潁川の境に入らさる例もあれ、只蚊斗はかゝる辨へもなし。

斉の桓公の国を治め給ひし、下つかたの貧しき民、夏の夜に蚊帳もなきはいかにうくつらからん。我其艱難をこゝろみ知らんとの給ひ、碧羅の蚊帳をしりぞけ給ひぬとかや。是なん延喜の皇の、寒き夜に御|衣をぬがせ給ひしと倭漢同軌にして、心なきゝはといふとも、などか是を感ぜざらんや。しかるに汝此時にあたりて、蚊帳のなきを幸ひとして終夜桓|公をさし喰ひ、明の日赤くうみつゐゑたるが、桓|公の肌より、ほた〳〵と落たるよし、劉|向が説苑に記し置ぬ。

又これらの童なども、てあそび知りぬる、二|十|四|孝|子の内に、呉猛といへるおさなきは、其父の貧しく、蚊帳もなくて臥ぬるをい

とけなき心にも、せちにかなしと思ひとり、其身一重の衣を脱て、父の傍にまろびふしぬ。是其父をさしくるしむる蚊のおのが身にのみとゞまりて、父に少く集らんことを願ふ心なるべし。かゝる孝子のこゝろざしは、云もて行にも涙こぼれぬべし。

たとへいかならんおそろしき獣、情なき鳥、知ることなき虫の類ひなりとも、などか是に感ぜざらん。しかるに汝此時にあたりても、其蚊帳もなく衣もなく、しかもおさな子の肌やわらかなるを幸として、思ふまゝに喰ひしありさま、書に残し画にとゞめて、今の世迄も伝はりぬ。

されば天地を動かし、鬼神を驚かす程の、至孝至信にも少しも感ずることなき、無下に情なきものゝ極めとは汝なるべし。凡かゝることを数へあげなんには、淇園の竹を伐尽すとも、汝が罪は彫つくすまじ。されど世上の見及び聞およぶ中に、汝に似たる人も多し。それをいかにせましや。

虫の諫中

虫の諫下

されば蚊の罪の大なる、其あらましかくのごとし。かゝる類ひは、天地の間に、なくてやみなんものなるに、生さして絶ざるこそ、天地の徳大にして、容ざることなき理りもしられ侍る。されば蚊子木、蚊母鳥の、蚊を生ずるあれば、蝙蝠、守宮の蚊を食するあり。物よく物を制する、その品多き中に、蜈蚣はよく蛇を制して、蛇は蛙を制す。嗚呼蛙汝何ゆへに、蛇ににくまるゝ事かくのごとくなるや。それ蛇の悪むべきわが言を待ずして、世人のよくしる所なり。其大をいへば、巴蛇は象を噉ひ、巨蟒は人を呑。其毒を論ずれば、岐首両頭の蛇、みる人其日を過ざるもありとかや。されどこれらはよのつねに値べくもあらず。

虺蜴の悪むべきは、詩人も是を詠じ、又壮士腕を断のふる言もあり。いま田家野村草路竹径のほとり、蝮蛇の害をなすは、処としてなきはなし。只其毒の甚しきのみならず、すべて蛇は、邪智深く、心恐しきものなり。

我知れる人、北国に住侍るあり。其人の語りしは、ある夕暮に、塒の鶏の、しきりにおどろきさはぐこと有。何事にかあらんと、立出見れば、大なる蛇の、軒をつたひ、梁をはなれ、塒の内に入て、雞卵をふくむにぞありける。にくしと思へど、かれがなすわざを見むと、隠れて守り居たりけるに、雞卵をふくみ得て、塒の外へはひ出たるに、胸のあたりさながらふくれて、今ふくみたる雞卵の形、そのまゝに見へたり。かくていかゞするならんと、なを〳〵守り居たりければ、やがて蛇は、塒をはなれ梁に上りぬ。さて梁の上より、下をのぞみて飛おちたるに、ひし〳〵となる音して、かの胸の間の雞卵つぶれぬると見るまゝ、もとのさまとなりて、ふたゝび塒へ入らんとす。是をみるにねたきこと限りなし。やをら出て駆退けぬるに、いづくともなく逃去ぬ。いと悪きことかな。

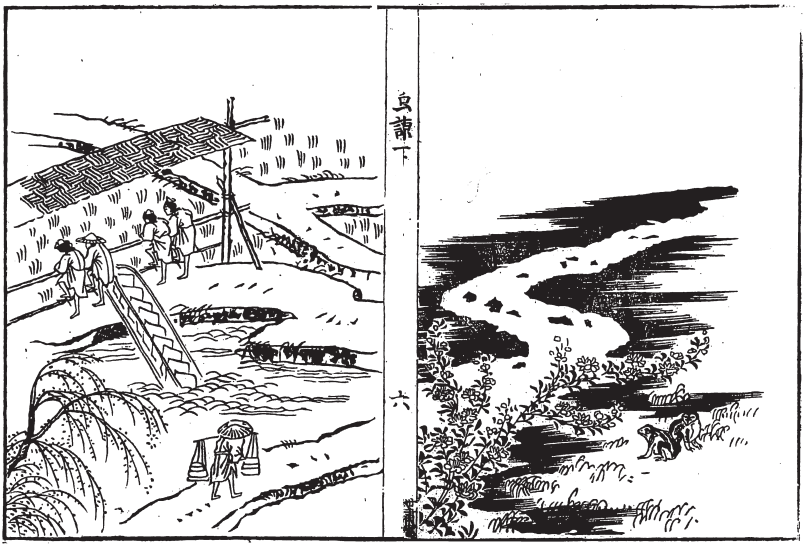
いかで腹ゐんと思ふまゝ、明の日塒の内の雞卵をば、残りなく取

かくし、木を以て鶏卵の形にいつくしくけづり、塒の内に入置、さりげなくうかゞひゐたりけるに、はたして蛇昨日のさまに入来り、かの木の卵をふくみ、例のやうに梁よりおちぬれども、なでう破るべき。又梁へ上りては落、かくすること二三度すれども、終に破れざれば、せん方なきさまにて、後園の方へはひ出ぬ。よくぞはからひぬるものかな、かしこくこそなしつれ。なをそのせんすべ見むとしたひ行に、隣家の壁の崩れ、やう〳〵と、蛇の入得べき程の穴あり。その穴へ、尾の方をさし入て、そろ〳〵にじり入るに、かの木の卵のほどにて、つまりて入得ず。とかくして、右左りへ身をひねりて、ひたすらにじり入けるに、木卵次第に口の方へ出て、終に是を吐出して去ぬとかや。

又是も同じ国の片山里にすめる民、夫婦の中におさなき子ひとりありけるが、夫の田面へ行ける留守に、妻なるもの、児に乳房ふくめて臥たりしが、児のよく寐入たるまゝ、あからさまにとて立出けるほど、あたりちかき人の尋ね訪ひしに、夫婦共にあらざりけるに、嬰児のなく声しきりなれば、いかなるにやとうかゞひ見るに、大なる蛇の、児をまとひ居たりければ、あはやと思ひながら、いかなるわざするにかあらんと、しばしためらひ守りたるに、蛇は児の腹をきり〳〵とまとひしめけるまゝ、今のみたりし乳汁の、児の口よりこぼれけるを、ひたものねぶるにてぞありける。あなあさまし、とやせんかくやせましと、おどろきまどいたるけはひに蛇は児をはなち、床の下へ這入ぬ。やがてはしり出、児の親なるものにもしらせ、床の下よりかり出し、打殺しすてけるとかや。其邪知深くして、心恐しき事、一さしるすにいとまあらず。

抑、汝蛙、何ゆへにか、此蛇の災にかゝること分て甚しきや。我つら〳〵蛙の行状を勘ふるに、其理りなきにあらず。今われ蛙の身を保ち害に遠ざかる道理を説聞すべし。汝よく是を聞わきまへ、こいねがはくは、蛇の口をのがれ、長く野池に安居すべし。さるにても今宵諸虫の集れる筵にも、汝蛙はじめに一大議論を発して、もろ〳〵の虫を感ぜしめ、又よくもろ〳〵の虫をいざなひすゝめて、我前へ来り、わが異見を聞んことを願ふ。汝まことに虫の中にては、なみ〳〵ならぬおこの者なり。いでや汝が先祖は、山城国井出の里より出て、橘氏の正統なり。民間に下りて歳久しといへども、堂上のこのみを忘れず、花に宿るうぐひすに対し、水にすむ蛙の歌よむこと、貫之も書残しぬ。誠に優にやさしきやうなれども、かの蛇に忌にくまれ、けやけき災にかゝるも、亦是によるなるべし。其故いかむとなれば、汝が系図は何にもせよ、野池邨田の中にすみて、人の上にていはゞ田父野人の身のさまなり。

又うぐひすといふ鳥は、もろこしにては何とかいふや覧。かの邦の黄鳥黄鶯といふ鳥は、うぐひすより大にして、惣身純黄に、羽先尾先、瑠璃色にて、光り美しく、其声は諸鳥の鳴音をうつして、それと定まれる声なし。和州小泉の藩侯、昔年長崎より、鶯鳥雌雄をもとめ得給ふ。われ其かたの人に尋きゝしに、かの邦より来る書に記し画にうつせると符合して、わが国のうぐひすにあらぬ事は



的然たり。されども我国に鶯なしといへば、詩歌の料とぼしく、風雅の鼓吹をうしなふに似たれば、しばらくうぐひすを以て、黄鳥となし、詩に作り和歌に詠ずる、又害なし。さるにてもかの鶯鳥は、一名を金衣鳥、又金衣公子ともいふぞかし。げに其鳥の姿いみじく、しかも陽春の時にあたりて、花柳の巷を徘徊するさま、もし人の上にていはゞ、貴介公子の、金鞍白馬、翩さたるありさまなり。されば和歌風流に心をよせて、其賞翫に預ること尤さもあるべし。

しかるを汝蛙田父野人の身を以て、鶯と並べ称せらるゝ事、風雅の徳といふべけれども、又おこの至りなり。凡、世人といへども貴賤位を定め、士農工商其等をことにす。されば、各其職分を守り、つとめておこたらぬを以てよしとす。しかるを縉纓の家に生れて、和歌管絃の道にうとく、武士は弓馬の術につたなく、商賈は技芸の途に馳、僧医は茶香に心を委ぬるなど、みなこれ末世の俗習にして、往さ家をたもち身を守るの器にあらず。

今蛙の身の上をいはゞ、春たがへし、夏くさぎり、秋刈て、冬おさめ、五雨十風の歳ゆたかにして、吏長の課責をまぬかれんことを願ふべし。彫胡の飯、香芹の羹、土釜に葉茶を煎じ磁盞ににごり酒をたゝへ、月の夜花のあした、ほどに従ひ分に応じたる楽みはありなんかし。万葉の古き歌に、たのしみはゆふがほ棚の下涼み男はてゝら女はふたのして、とあるこそ、心のどかに、羨しき方もこそあれ。

しかるに今の世をみれば、片田舎の村民迄も、父祖の餘慶、又は其身の僥倖により、田地山林かたのごとくあるきはゝ、多く本

業をすてゝ、末-利を逐ひ、或は何の用もなきに、都にのぼり、難波にあそび、和-歌誹-諧の席につらなり、茶-香韈鞠の場にまじはり、乱舞優曲其好む所に従ひ、衣-服を美にし、刀剣をかざり、金-衣-公-子の参会をもとめ、遂に花-柳の巷に身を委ね、財をうしなひ、業をやぶるもの十にして七八なり。

さるにても和歌は神-代よりはじまるとかや。実我邦のいまだかたち造りなき時、陰-陽の二神、左にめぐり、右にめぐり、唱へ給ひし、此道のはじめといふべかめれ。八-雲立の神詠にいたりては、すでに三十一文字の基礎定まり、それよりのち、もはら我邦の風俗となり、富の小川の流れたへせぬ今の世にいたり、皇-統の綿〻たる、万-代一-姓、かゝるありがたきことは、他の邦には聞もよばず。

されば我邦に生れたらん人は、誰か敷-嶋の道をとふとみあふがざるべき。しかはあれど、聖-主、賢-王の統をたれ、典を定め給ふも、後-世の弊をすくふことあたはず。琴-柱に膠して琴を弾ずれば、律呂のしらべと、のひがたし。和歌は心をたねとしてといへるは、詩は性-情の正とあると同じ深き道理もあるべきを、中-古陵-夷の後、人たゞ春-花を弄びて秋-実を棄、錦-心繡-腸むなしく月-露の巧みをもとめ、瓊簡玉箋徒に花-鳥の情を通ず。

こゝにをゐて、玉階草-生て奔〻の鶉をかくし、上-苑菊ひらきて綏〻の狐たはぶる。（鶉之奔-〻有-狐綏-〻。ともに淫-奔の詩。詩-経に見ゆ。）謇諤の風-日にうとく、淫靡の習、年に長ず。正-史には日-本続-紀、小-説には古-今著聞、宇-治拾遺などの載するところをみるに、其時-代のありさま、なぞらへしるべし。

朝綱上にゆるみ、武権下にたくましく、九-門八省古に復せざる、其よるところなきにしもあらず。さるにても好色の物をうつす、我金亀をみて感なきことあたはず。金-碧相まじはり、誠にいつくしき虫なり。されば我邦の婦-女、これをとり、白粉を衣とし、手箱の内にひめ置に、年を経て光彩変ぜず。嗚呼、汝何の才-芸もなく、只風-流冶容を事とし、身婦-女の手に死して悔ず。まどへるかな〳〵。しかはあれど此まどひ何ぞだゞ金-亀のみならんや。干将莫邪が剣も、愛着のきづなを断ことあたはず。七-宝九-微の灯も、煩悩のやみをてらしがたし。意-馬あしたに嘶き、心-猿夜さけぶ。やまともろこしも、いにしへも今も、老たるもわかきも、智あるも愚なるも、駸〻として進み、滔〻としてかへらず。一-生その窠臼を脱することなし、悲かな。

楚の項王、力山をぬき、いきほひ世をおゝふも、軍烏-江に破れて、名残を虞氏におしみ、漢の高-祖の濶達大-度なるも、黄鵠歌-就て腸を戚夫-人に断。漢武の時にあたりて、蘇武胡国へ使せしに、胡-王蘇-武をして降らしめんとす。蘇-武肯て降らず。胡-王いかりて蘇-武をとゞめて帰さず。蘇-武胡-国にあること十九年、もろ〳〵の艱難経ざることなし。寒-天に食尽て雪を嚼、節-毛を啖にいたりても、其節-操いさゝかも撓まず。終に使-命をはづかしめずして中国に帰る。忠-義の心、白-日をかくといふべし。しかれども、蘇-武胡-国にあるうち、胡-婦になれ、二子を設けぬと、史-冊にみへ侍れ

ば、是をこゝに守れども、彼に忍ぶことのかたきにや。

南宋のはじめ、胡澹菴といへる学士、時の宰相秦檜が姦邪国をあやまる罪状を、時の天子へ上疏し、はやく秦檜を斬て、天下に謝せよといふ。満朝の群臣、これがために色をうしなふ。はたして逆鱗にふれ、遠き国へ流されしに、年を経て赦免あり。帰洛の途中にて、したしき友、悦びの酒をすゝむるに、梨花という妓の、席にありて、声おかしく歌ひかなでしに、澹菴これを称し、詩をつくりて梨花に与ふ。後来朱晦菴の詩に、幾人到此誤平生とは胡澹菴のことを聞て、みづからいましめられしとかや。されどもこれらは、一時の風流ともいふべくして、其人の瑕疵とするにたらず。

しかはあれど、僅に風雅風流を説けば、其弊放蕩に流れやすし。さればゆたかに聖域へもいたりし人はさらなり、其余は鉄石をもつて心腸となすといへども、鉛華の銷鑠をうけざるはいくばくもあらず。是を釈門の中に証せば普寂の魔女、至聡が紅蓮、羅什、善無畏、皆慾海の波浪を避ることあたはず。

されば魯哀公仁を夫子にたづね給ひしにも、夫子色に淫せざるをもつて答へ給ふ。仏祖は是を血嚢にたとへ、道家はこれを火坑に比す。三教おもむきをことにすといへども、色をいましむるにをゐて、すべて深切なり。但古聖人の色をいましめ給ふは、是を断よとにはあらず。只人さ其程にしたがひ、守る処ありて、濫りなる事なかれとなり。

されば天子に三后九嬪、以下定れる数あり。諸侯大夫其位にしたがひ、下なべての士人にいたりても、一妻一妾をゆるし給ふは、家嗣を重んじ、祖先のまつりを断じとのことなれども、亦一つには、好色は人の欲する所なれば、すこしくゆるす処あるは、大にみだりなることなからしめんとにやあらむ。

しかるを我邦今の世にあたりて、なべての士人、妻室の外に、一妾を蓄ふ時は、物議にかゝり、其人を以て謹厚ならずとす。これをもつて、やゝ名聞にかゝはる人は、外宅ををくことをはゞかる。是もとより風俗の美といふべし。

さらばはたして其人謹厚にして、只一妻をあが仏と守り、一生を偕老するか。我つら〳〵世上を見るに、かゝる人は十にして二三人を得がたし。退て其屋漏を察すれば、侍児に戯れ、炊婢に淫し、その余いたらざる所なし。其上あらはして妾と云名もなく、只事をみそかになさんとする故に、はからずも一家の中にして、兄弟一女に通じ、主僕一婢をともにするなど、いふに忍びざる物あり。家政是がために乱れ、醜声四隣に満るに到る。

あるは僅に是を家内に忍び、外花街柳陌にあそび、歌娼舞妓馴ざるはなし。三都の外諸藩の城下などは、物議いよ〳〵かまびすしく、まして烟華の郷とてもなく、仕官の途、名聞を求る念も甚しく、ひたすら外面を憚るゆへ、内行いよ〳〵みだりなる輩おゝし。されば侍児炊婦に戯るゝは更にもいはず、東隣の処女をぬすみ、西家の寡婦に淫し、甚しきは他人の妻妾に姦通するも、比さとし

てたへず。

是そも何事ぞや。方今天|下僧|徒の中にも、戒|行正しきをもとめば、これまた十にして二三人にはすぎじ。其余凡庸の沙|門、身緇|衣を着し、口梵唄を唱れども、その内|行の淫穢、却て世|俗より甚しきものあり。是皆守りがたきことを、強てまもらしめんとするより、却て濫するに到るなるべし。是等の道理は、たゞ好|色に限らず、凡天|下のこと皆しかり。

されば人の上にたちて、下をおさむる職にあたりたる人、又一|家の内にても、子|弟をも教導せん人は、心得あるべきことなめり。さるにてもなべて好|色情|欲といへど、色と慾と情と、三のものゝ異なり。其中にていはゞ、欲を制し、色を戒むるはやすく、情を割ことはもつともかたし。漢の中|山靖王内をこのみ、生|子百|二|十|人におよぶなどは、是慾なり。唐の玄宗両|宮の美|人心に叶はず、楊妃を寿邸にもとむる類ひは、これ色なり。

上は王|侯より、下庶|民にいたるまで、勢を当|世に得て、財ゆたかに、よろづ心のまゝなる人、此二の病なきはまれなり。されどやゝこゝろざしあらん人の、つとめてこれを制せんに、何のかたきことかあらん。方今財を殖し、家をおこす商賈の、色|慾におぼれざるは、いくらもあり。是其|人格|別の見|識あるにはあらねども、其|志貨殖にありて、倹約を守ることもつぱらなり。まして聖|賢の道にこゝろざし、不|朽の業に志ある人におゐてをや。

只情を制するにいたりては、やゝこゝろある人ほどいよ〳〵かたし。さらば何をか情といふや。晋の王夷甫が、大|上は情を遣、凡|下は情に及ばず。情のあつまるところ我輩にありといへるにて、情の字を心得べし。やまと歌に心ある、こゝろなきなどよめる、心といふは則情なり。藤原為秀卿の歌に、ひたすらにこゝろなき身の秋ならば夕の空にものはおもはじ。今|川了|俊、此歌を聞て、感|称のあまり、為|秀卿の和歌の弟子となられけるとかや。げに心なききは、、秋の夕のあはれさも、何とおもひわきまふることもあるまじ。世のあはれ、人のたゝずまひをも、何くれと思ひとぢむるものから、難波のよしあし、そこはかとなく物おもふ秋の夕を扨いかにせんと、打わびたるにこそあらめ。

さるにても情|義相|感ずるにいたりては、二|八の韶顔にもよらず、衰残の暮|景をもいはず。合巹の正しき契り、芍|薬のまさなきおくりもの、其品をことにすといへども、あるはつくば山のしげき人目をかこち、または瀧川のわれても末をたのみ、春の日のうらゝかなるに、たれこめてひとりごち、霜夜の寒きに、いねやらでさすらひありくなど、みなこれ情を割ことあたはざる故ぞかし。

石季倫が一|妓の緑珠をおしみて、閨門の禍をかへりみず、荀奉倩は最|愛の妻にわかれて百|年の命をおとすなど、聖|賢のをきてをもつて論ぜば、色にまよひ身を忘るゝ、不|忠不|孝の罪尤大なり。されどひたすら心なききはゝ、又かくもあらざらまし。なまなかの才あり情ある人の上にこそあらめ。恐るべし。そのかみ南|朝の天|子、楠正行に宮|女を降し給りしに、正行かたくいなみて詔に従はず。

人其故を問に、正一行その答をなさで、一一首の和一歌を詠ず。とても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契をいかで結ばん。是こそ情を制するよき規則ならめ。たゞ白糸のいまだ染ざる前に、耳目をとぢてはやく不浄観に入にしかず。是をそのはじめに制せずして、これを纏綿の後に制せんとすれば、万一牛首を回らして其勢ひ挽回しがたし。

しかのみならず、あやにくなる世のならひにて、男一女の風一流も願ひのまゝなるはいくばくもなし。ちかき我一邦のためしはさらにもいはじ。もろこしの書をみるにも、所謂美一人才一女おゝくは薄命なり。今その一一二をあげていはゞ、紫玉うらみを韓重にのみ、西施かなしびを烟一波にとゞめ、公一主黄鵠を弾じ、昭一君青塚を残し、李夫人それかあらぬかの姿、班婕妤が恩一情中一絶の咏、趙家の姉妹、魏宮の甄氏桃一葉悍婦にせまり、非一烟暴主にくるしむ。潘妃が金一蓮の栄も、斉一宮の夢みじかく、麗華が玉一樹の歌も、景一陽の烟迹なし。碧一玉が芙蓉秋一浦におとろへ、大一真の羅襪馬嵬にとゞまり、燕子一楼一中の月、古き枕をたづね、鴛一鴦一機一上の燈ひとりねの床を照し、王一婉容が血は石に透り、回一心一院の辞日をつらぬく。かゝる類ひしるすにいとまあらず。

朱明のときに、広陵の歌妓小一青といへるものあり。歌舞の世にひいで、みめかたちの人にすぐれたるはさらなり、こゝろばへのどかに、しかも書をよみ、詩にたくみにして、其志一操もまた高く、よの常のたはれ男に相なるゝことを願はず。只文一雅風一流にて、まことに情あらん人と偕老せんことを願ひける。しかれども不遇にして、こゝろに叶ふ縁なく、なぐさむことなきまゝ、日一さ清一江のほとりに出、石一上にのぼり、わが影を水にうつし、小一青さ一さ、誰か汝を知らんと、わがかげにむかひ、ひとりごちて過しけるが、末一路に思はぬ方の妾となり、田舎へ下りけるに、あるじの妻ものねたみして、いとはしたなくもてなしけるまゝ、いとゞおのがすくせをかこちなげき、終に身をなげ、むなしくなりぬ。

されば唐伯虎が詩に、駿一馬常に駄二痴漢一を一走り、巧妻一長一伴二拙一夫一眠と作れる。世一間不一遇不一平の事、なんぞたゞひとりの小青のみならん。何ぞたゞ美一人才一女のみならん。古一今の名一士才一子、おおくは是にひとし。まして我一邦の士一人は俸禄の外に、五畝の田一宅もなければ、出一処進一退の勢、また古一人にことなり。

されば両一都の賦一才も五一車の書にともしく、口を官一途に糊するも、往さ窮猿木をゑらぶにいとまあらず。経一綸の才錦繡の腸ありても、騏足を小一邦の中に絆ひ、鴻論を俗一吏の下につぐむ。かなしひかな。

さるにてもかくいひもてゆけばはてしなく、まだ初一秋のみじか夜、明がたちかくなりぬれば、よしや今一宵の評一論はこゝにやむべし。右にもれぬる類ひも、おしなぞらへてしるべきもの也。なを此上には、宵に蛙のいへるごとく、汝が類ひの上にたちて、おしへみちびく君一長を定め得さすべし。いでや諸一虫の中にして、才一徳兼そなはり、よきをすゝめ、あしきをしりぞくる政明らかに、長く虫一類の君一長

となり、かの鳥|獣の中の麟|鳳にも立ならぶべきはいずれなる覧。

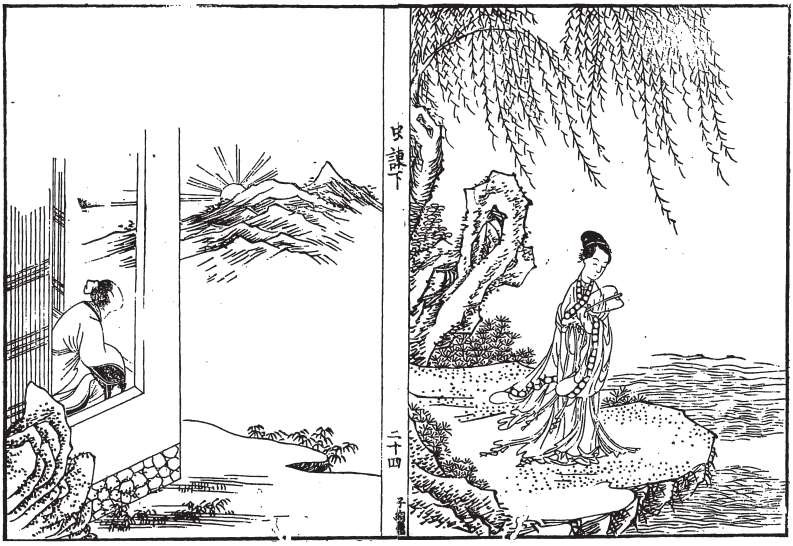
かの蛍のごとき、そのかみまづしかりし書|生の時は、孫敬先|生の窓に寄宿し、読|書の功をつみぬれば、その文|学もとより賞するにたれり。しかれども、わづかに富|貴の身となりぬれば、たちまちはじめの志を変じ、隋の煬帝の景|華|宮へ召され、宮|女の中に立まじり、長|夜の飲をともにしつれば、其節|操とるにたらず。かぶとむしの治|世にも武備をわすれざるは、その武用ゆべしといへども、昼|夜甲|冑を着したるは、また甚しといふべし。

されば文あれば質とぼしく、武あれば文たらず。文武兼そなはり、才|徳二つながら全きは、人の中にも得がたし。まして是を虫|類の中にもとめんに、其得がたきこと又むべならずや。われつら〳〵諸|虫の中を察するに、この選に応ぜんもの、蟋蟀ならで外になし。しかるに蟋|蟀の大徳あること、世人といへども是をしらず。さればなんぢがたぐひ、わが此言をきかば、おどろきて信ぜざるべし。蟋蟀一|名は蛩、又竈馬、和|名きりぐす、俗にいとゞかうろぎといふ虫なり。促織莎雞もまた其党なり。その門閥をいはゞ、詩|経に蟋|蟀の章あり。万|葉にきりぐすをよみ、その名和|漢にあらはるゝ、年代すでに久し。さればその家|筋を以て諸虫の上に立とも、たれかこれをあらそはん。其色の玄|黄は、天|地の正|色をあらはし、龐眉長|髯、大|人の徳容そなはる。三|春の繁|華をさけ、九|秋の閑寂を楽しむ。其志|操もまた崇べし。

凡諸|虫のありさまをみるに、蜂蝶の春にうかれ、蜩蟬の夏に唫じ、蚊虻の暑|天に乗じ、蛍|火の夜陰にかゞやく類ひ、しばしおのが時を得たり顔なれども、時|過節去、野|分木がらし吹まよへば、忽身の置どころなし。

只蟋|蟀ばかりはさあらず。詩の唐|風に、七|月在レ野|に八|月在レ戸|に十|月蟋|蟀入二我|が床|下|一と。是なん時をもて進|退して、寒気至れども狼狽することなき、其知|識の他|虫にまされる一つなり。されば古|歌にも此心を、きりぐすなくや霜夜のさむしろなどよめり。かの蚤蝨蜈蚣蜘蛛などの、人に害あるは更にもいはじ。其余のむしといへども、たま〳〵坐|席へ出れば、是をとりすてゝしばらくもゆるさず。たゞ蟋|蟀ばかりはさあらず。夜さむさまざるにしたがひ、次|第に人にしたしみ、閨の莚をともにすれども、曽ていとひきらはず、却て詩|歌の鼓吹となすは、大|徳なくしてかゝることを得んや。いはんや鳴音の清亮にして、しかも耕織の本|業をわすれず、物縫ふことを婦|人におしゆる。（古語に促織鳴て嬾婦忙とあり。古歌につゞれさせてふきりぐすなくともあり。）是その他|虫にまされるまた一つなり。

さるほどに右にいへるごとく、今俗にかうぎいとゞといふは、本|名蟋|蟀のきりぐすなるを、いつのころよりかあやまりて、竹林艸径の中に生ずる、瓜喰虫をきりぐすとよび、三|都の市にては、売るものあれば買人ありて、小き籠に入、児|童のもてあそびとす。されば蟋蟀は、先|祖より伝りし本名を、うりくひむしに奪はれぬれば、もし他|虫にあらば、いかばかりうらみ憤るべきに、いさゝかもその気色なく、きりぐすの名を瓜|喰むしにゆづり、われ



はいとゞかうろぎの俗」称をもて世に称せられ、恬然として自」得せる、寛厚の器」量、他」虫の及ぶべからざるまた一つ也。

しかるに瓜」喰むしは、いやしき身をもて、きりぐ〳〵すの名をぬすみ、おのが面」目とおもへど却て是がために、人にさがしもとめられて、からきめに逢。蟋」蟀は本名を瓜」喰むしに譲るをもて、其害をまぬがれ、只和」漢の心ある人にのみ、きりぐ〳〵すとしられ、なみ〳〵の人には、たゞいとゞかうろぎと呼れ、害に遠ざかり、災をまぬがるゝこと、瓜くいむしと賢愚得」失、天」地の違なり。しかふして只謙退の美」徳あるのみならず。三」軍に、臨みては、その智」謀勇」武も、諸」虫にすぐれたればこそ、蟋」蟀を闘すこと、賈秋壑が蟋」蟀」経に詳かなり。

されば文」武才」徳兼備り、諸」虫の君」長となりても、恥ることなきものなれば、今より虫」類の長となりて、その政をしるべきものなり。夫為政の道は大にして、其術もまた多端なり、一」言の尽すべきにあらず。今かりそめにたとへを虫の類にとらば、亦なを蜾蠃と螟蛉のごとし。心まことに是を唱れば、その唱ふる所に変化す。

堯」舜仁を唱へて民仁におこり、桀」紂暴を唱へて民暴におこる。上利をこのめば下甚しきものあり。古諺に城」中広眉をこのめば、城」外広きこと一」尺ともあり。汝虫」類の政をとらば、又よくみづからつとめて下を帥よ。廉恥の道を明らかにして、貨賂の源をふさぎ、上」下交利の弊を救へ。昇平久しければ、君」上のたゞずまひ次」第に重く、上」下の情次」第にはなれ、新」令次」第にしげく、旧章次」第に

亡び、奢侈次第に長じ、民俗しだいにやぶれ、用度しだいにひろく、賦斂次第にあつく、士人次第に窮し、遊民次第に多し。汝そのよるところを察して、綱紀をかゝげ、賞罰を明らかにせよ。

蝸牛頭上の二国をして、利をむさぼりて、私の闘をなすことを制し、蛍の文学をこのむも、浮華の習を去、実学をつとめしめ、かぶとむしくつわむしの武職には、治世にも武備をおこたらしめず、蟷螂蝿虎の匹夫の勇をおさへ、子としては孝に死し、臣としては忠に死することはりをおしえ、蚕の身をころして人をたすくるをあはれみ、蝉の志高く行いさぎよきを賞し、蜂蝶の軽薄の風俗を正し、蜘蛛の賊害をなすものを捕誅し、斑猫蜥蜴の姦吏をして、みだりに毒をほどこすことなからしめ、虻のつよきをころして、蛙のよはきをたすけ、夏の日くもるとも、蚊をしてひる求食しむることなかれ。ともし火あきらなりとても、蝿をして夜出ることなからしめよ。蟻の冬粮を夏日にあつむる、その心がけはもつともさあるべきことながら、みだりに類を引、友をかたらひ、階より上へのぼることを禁ぜよ。紙魚の身を書籍に託する、その志たつとぶべしといへども、却て聖賢の文字を喰やぶる罪をおかしぬ。髪切むしの髪をきるも、たゞ寡婦老女をのみ済度することをゆるして、妄に室女をすゝめて尼となし、天倫をそこなふことなからしめよ。

蜈蚣げじ〳〵あぶらむしの類ひ、夜中に人家の閨門を出入することをいましめ、金亀の好色に身をあやまり、飛蛾の利慾に命をうしなひ、松むし鈴むしの音曲にふけり、醯雞の酒に乱るゝ類ひをさとしおしえ、おのれ〳〵が本業をつとめしめよ。

其余一〻論ずるにいとまあらず。くだ〳〵しければ今はやむべしと語る内に、鶏啼鐘なり、ひましらみゆけば、集りつどひし虫の数〳〵、各われに一謝する風情にて、蟋蟀を先にたて、草むら深く立かくれぬとみるまゝ、尾花真萩に朝露しろくをきまよひたる砌に、先生一人兀然として坐しぬ。

虫の諫下大尾

不認此印
者係偽刻

虫諫後序

余読二虫諫一至二金亀子一。蓋知二其意ヲ一云。夫明君之於レ臣。知二其才ヲ一而不レ竭サシメレ之ヲ。是乃欲スル二大任セント一レ之ヲ乎。忠臣之於レ職ニ。蹇〻忘レ二其以ト不ヲ一レ以。能致シ二其身ヲ一。唯職之視。於レ是乎。上下之レ協ス。焉ゾ論ゼン二不ト一レ可レ不レ君不ヲ一レ可レ不レ臣也乎。夫レ士自許シテ二其有才ヲ一。而在二乎散一也。不レ知レ均スルヲ二其散ヲ乎不ニ一レ散ナラ。乃心謂君之於レ我ニ。其知ントレ之ヲ矣。而ニ猶未シ。而不二鞅一〻怫鬱セ一者ハ。幾ド鮮矣。或ハ居二乎劇一也。頗底セバ二其効ヲ一。乃矜リ二其才ニ一。

国立国会図書館所蔵『虫の諫』――翻刻と解題――

自愉二快一、勝リ一レ任ニ。怨レ不ヲ擢二清一要一。滔々皆是也。

友人江北海。磊落奇辯。緜麗宏博。以レ儒仕二某侯一。而居二今ノ世ニ一兼リ二古道ヲ一。其政術施設。欲ト発シ二之ヲ著論ニ一。破二其冗腐ヲ一。以為ント中不朽ト上。晏一二如於其散一。汲二一々乎其職ニ一。其転二今職一也。吏事旁午。夙夜維ノ寅ミ。儒術潤飾シ。巧計奇中シ。公家之利。知無レ不レ為。視レ有ヲレ職忘レ有レ身。無レ不レ称セ二一切治辨ト一。猶唯恐二奉一職無一状ナラント一。

其暇有二此業一。似二以有レ所レ托スル而洩者ニ一。是乃為ニ二夫ノ抑一塞憤結ノ者ノ一発レ之ヲ。是則有レ意二乎人之欲一善ヲ。誰カ不ンニ一レ如レ我。蓋有二才不一レ手ニセヲ。慍二人ノ不一レ知者ハ。不二亦士之常ナラ一乎。然リ而豈臣タルレ人之為ンヤ。使三臣ニ抱二不平ヲ一者。豈亦君タルレ人ニ之為ンヤ。夫在レ上ニ欲レ察センヲ二其下ヲ一。有ト如ナル三服レ塩ヲ而窘ガ二太行ニ一者上乎。有ト如二錐ノ未一レ処セ二嚢中ニ一者上乎。是誰ノ之過ソヤト也。

下而欲レ安センヲ二其職ニ一。抱一関撃柝委吏司職。古ノ聖一賢之レ安ジ之守ル。唯有ト命耳。念コトレ茲在茲。成モレ茲在レ茲。是則北海ノ意ナル哉。此篇也小。可二以喩スレ大ニ矣。故作レ序云爾。

梅龍道人撰
毛定写

《虫の諫後序

余、虫の諫を読み、金亀子に至り、蓋し其の意を知ると云ふ。夫れ明君の臣に於いては、其の才を知りて之を竭さしめず。是れ乃ち大いに之を任ぜんと欲するか。忠臣の職に於いては、蹇々として其の以てすると以てせざるとを忘れ、能く其の身を致し、唯だ職を之れ視るのみ。是に於いてか、上下之れ協す。焉んぞ君たらざる可からずと臣たらざる可からずとを論ぜんや。夫れ士は自ら其の有才を許して、散に在るや、其の散を散ならざるに均しくするを知らず。乃ち心に謂へらく、君の我に於いて、其れ之を知らんと。而るに猶ほ未だしとして、鞅々として怫鬱せざる者は、幾ど鮮し。或は劇に居るや、頗る其の効を底せば、乃ち其の才に矜り、自ら任に勝へたりと愉快し、清要に擢んでざるを怨む。滔々として皆な是れなり。

友人江北海、磊落奇辯、緜麗宏博、儒を以て某侯に仕ふ。而して今の世に居りて、古道を秉り、其の政術施設、之を著論に発し、其の冗腐を破り、以て不朽と為さんと欲す。其の散に晏如とし、其の職に汲々たり。其れ今の職に転ずるや、吏事旁午、夙夜維れ寅しみ、儒術潤飾し、巧計奇中し、公家の利、知りて為さざること無し。職有るを視て、身有るを忘れ、一切治辨と称せざること無きも、猶ほ唯だ奉職の無状ならんと恐るるのみ。

其の暇に此の業有るは、以て托する所有りて洩らす者に似たり。是れ乃ち夫の抑塞憤結の者の為に之を発す。是れ則ち人の善を欲すること、誰か我に如かざらんに意有り。蓋し才の手にせられざる有りて、人の知らざるを慍る者は、亦た士の常ならずや。然り而して豈に人に臣たること之れ為さんや。臣に不平を抱かさ使むる者は、

豈に亦た人に君たること之れ為さんや。夫れ上に在りて其の下を察せんことを欲するは、塩を服して太行に窘しむが如くなる者有るか。錐の未だ囊中に処せざる如き者有るか。是れ誰の過ぞやとなり。

下にして其の職に安んぜんことを欲するは、抱関、撃柝、委吏、司職、古の聖賢は之れ安んじ之れ守る。唯だ命有りとのみ。茲を念ふこと茲に在り、茲を成すも茲に在り。是れ則ち北海の意なるかな。此の篇や小なるも、以て大に喩す可し。故に序を作りて云ふこと爾り。

梅龍道人撰

毛定写》

宝暦十二年壬午季秋

西堀川仏光寺下ル町
平安書肆　唐本屋吉左衛門発行